

「天神仮託百首」の形成

——「貞治元年神託百首」を中心に——

野本 瑠美

一 はじめに

平安中期の官人で漢詩人としても著名な菅原道真は、『古今集』以下の勅撰集に入集する歌人でもあった。だが、家集は現存せず、「筑紫にて…折々の歌書きおかせたまへりけるを、おのづから世に散り聞えしなり」（『大鏡』時平伝）や「道真公所^レ詠歌集曰「菅家御集」。有「一卷」（『菅家御伝記』）などの記述^{〔1〕}によって、その存在を窺い知るばかりである。^{〔2〕}一方で、中世から近世にかけて、道真とは全く別人の詠作を収載しながら、作者を道真とする家集や百首が流布した。これらの家集・百首は、道真の勅撰集入集歌を含みつつも、後代の他人詠を数多く含む上、詠者を神格化した道真、すなわち天神に仮託しているため、「天神仮託歌

集」^{〔3〕}（以下、「仮託歌集」と略称する）と呼ばれる。

「仮託歌集」の伝本は膨大な数にのぼる上、複数の歌集が合写されて一書を成していたり、同じ書名であっても所収歌が全く異なる場合もあり、その全容を把握することは困難であった。だが、武井和人氏の研究^{〔4〕}によって、この複雑な歌集群の全体像が明らかにされ（以下、武井氏による伝本分類を「武井分類」と呼ぶ）、その後『宝鏡寺藏『妙法天神経解釈』全注釈と研究』^{〔5〕}（以下、『全注釈』と略称する）において、武井分類を基本としつつ、家集に合写されていた小歌群を新たに特立させるなどの整理・再分類が行われている（以下、『全注釈』の分類を「全注釈分類」と呼ぶ）。

「仮託歌集」の成立については、現段階では不明な点が多い。奥書・識語類から武井氏は室町末期を成立下限とし、

一六五〇年頃を境に急速に流布したと指摘する。『全注釈』解説では、室町末期頃から続々と生み出されていく、とする。武井氏は「仮託歌集」を「和歌史の表舞台に出る」作品ではないと断りつつも、「中世和歌史を叙述する上で、欠くべからざる資料」と位置づけ、「より一層の伝本の博搜と、完璧な校本の作成、出典の網羅的な調査、それらに基づく総合的な考察」の必要性を訴えた。以後、『全注釈』を始め、新たな伝本の紹介や「仮託歌集」の内容や享受に関わる研究が進められているが、「総合的な考察」に至るためには、なお多くの研究の蓄積が必要と考えられる。本稿では、先行研究で取り上げられることの少なかった、貞治元年（一三六二）に北野社で発見されたという由来を持つ「天神仮託百首」（武井分類・百首戊系統／全注釈分類・百首歌系f系統、以下、戊／f系統と表記する）について、由来譚の構成と百首の内容から「仮託百首」成立の過程を考察していきたい。

二 「天神仮託百首」（戊／f系統）の特徴と 山岸文庫蔵『天神百詠』

現在、戊／f系統の百首歌は、道明寺天満宮や神宮文庫、実践女子大学山岸文庫などに所蔵されている七本が確認されている。書名は各伝本によってまちまちで、統一できる

ような書名を持たない。書写年代が最も古いと思われるのは、江田世恭が宝暦九年（一七五九）に道明寺天満宮に奉納した『天神御詠百首』で、江戸初期の堯然入道親王（慶長七年（一六〇二）～寛文元年（一六六一））の筆とされる。それ以外は奥書や識語を持たない伝本が多く、正確な書写年代は不明だが、いずれも江戸中・後期の写本とされる。道明寺天満宮本・山岸文庫本・神宮文庫本・刈谷市立図書館村上文庫本の四本には、百首歌の他に、天神の五実名や秘文と呼ばれる七言句、それらを発見するに至った由来を語る長文が付され、和歌・実名・秘文を用いた天神への具体的な祈願方法が記されている。

百首歌部分は春二〇首・夏一〇首・秋二〇首・冬一〇首・恋二〇首・雑二〇首に部類され、四季部では、ほぼ季節の推移に沿った排列がなされている。「仮託百首」は現在八種類あるが、そのうちの六種は部立を持たない。戊／f系統以外で唯一部立を持つF／h系統は、巻頭に立春詠ではなく、道真の著名な一首「東風ふかば匂ひをこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」を置き、季節の推移による排列にはなっていない。また、武井氏の研究により、戊／f系統の百首は他系統の「仮託百首」と共通歌が極めて少ないことが指摘され、「異本」と称されている。

戊／f系統の由来譚に記された百首歌発見の顛末をまとめると以下の通りである。貞治元年（一三六二）三月二四日の夜、光嚴院^⑩の夢に、衣冠正しき姿をした上臈が現れ「私が西海へ赴く時に、後の奇瑞を顕そうと、一夜松の西に、青料紙に記した百首と秘文と実名を埋めておいた。今、それを掘り出し、どの歌でもよいから一首に実名を書き添えて、私に向かうように信心を起せば、病にかからないようにしよう。秘文に実名を書いて埋めれば、疫病を払おう。実名を書いて祈れば願いを叶えよう」と告げたので、指定の場所を掘らせてみたところ、道真真筆の百首と秘文が夢告通りに発見された、という。書写年代の古い道明寺天満宮本では、この由来譚の末尾部分が「これ（稿者注、当該百首を指す）ハ雲上の外は関白、為重卿、北野法眼、その外家くゝにハ未知然を、康暦元年二月廿日後筑紫上洛して法眼対面の時此書を随分^{踏されてみへず}^⑪」とあり、秘蔵されていた当該百首を、筑紫から上洛してきた某が尋ねて…という部分で途切れている（村上文庫本もほぼ同文^⑫）。山岸文庫蔵『天神百詠』のみ、「然を康暦元年二月廿日筑紫より上洛して、法眼に対面するとき此書を随分の志をはげまして令傳受所実也。法眼依有数度之志範誓搏^つ畢^⑬」と、道明寺天満宮本や村上文庫本で欠落していた部分が現存している。こ

れによつて、筑紫から上洛してきた範誓なる人物が志を重ねて、法眼からこの書を伝授されたという由来譚の全文が判明するのである。山岸文庫本は歌数や異同の点からも最古写本である道明寺天満宮本に近く、現存伝本中唯一、由来譚を末尾まで完備している。以下、戊／f系統百首の引用は山岸文庫本に拠り、必要に応じて他本により校訂を行った^⑭。

三 百首由来譚の仮構

まず、百首の由来譚について検討していきたい。由来譚の全文を次に掲げる。

貞治元年三月廿四日夜、前光嚴院殿御枕上に衣冠正しき上臈一人参せて、申させ給ひけるは、吾は是北野に住ゐして常に奉公致者也。我西國へ赴かんとせし時、後の奇瑞をあらはさんために、一夜松の西へさしたる根の下に埋たる石の唐櫃あり。今時を得たる人を遣してほり出されよ。其中に青き料紙に書たる百首の歌並秘文あり。次五実名あり。是を取て百首のうたのうちいづれにても一首一名を書添て、我に向がごとく信心いたし給はば、諸の中天、時の病患を其身に影をささしめじ。亦其所の内へ疫病いれじと思はば、この秘文

を書て一之実名を書添て東西南北に埋むべし。然らば我毎日来臨してその病患を払はしめん。又実名を書添て佛眼大徳之咒五返、大金剛輪咒七返、金眼名廿一返、右如此約束をたがへず、此文を毎日廿五返誦して吾定の所の廻向を以て諸佛を祈らば、毎日三度宛来臨有て立懸て守護し、諸願を令満足と申させ給ふと思召候、御夢覚給ふ。徳大寺三位堀川侍従両使を以て北野の法眼に被仰付、御子左二位中将為重卿を相添て一夜松の西へ指たる根の下を掘らせ給へば、深さ七尺を過て約束の石の唐櫃有。為重卿是を披見し給ふに、青地の金襴にて上巻したる、彼神の真筆有。則夢中の約束のごとし。是は雲の上の外は関白為重卿北野の法眼、其外所々には未知らせず。然を康暦元年二月廿日筑紫より上洛して法眼に対面するとき、此書を随分の志をはげまして令傳受所実也。法眼依旨数度之志範誓⁽¹⁷⁾搏畢。

この百首由来譚には、日時・場所・人物などの情報が極めて具体的に記されている。とはいえ、他の記録類からは全く確認できない内容で、偽作と考えられる⁽¹⁸⁾。だが『全注釈』解説が指摘するように、このような秘伝性を帯びながら享受される形態からは、享受者の「天神の歌として理解する意識」⁽¹⁶⁾を読み取るべきであろう。由来譚の記述は、他

の「仮託歌集」に通じる特徴を備えているからである。例えば、夢告によつて掘り出されるという特徴は、武井分類B甲（全注釈分類Ⅲ）に含まれる「御詠二十五首」に付された「今川殿依夢想被掘出哥也」⁽¹⁹⁾という注記とも共通する。夢想によつて得られた和歌が、しかるべき場所に秘蔵されていたという経緯は、丙／d系統の百首奥書に見られる安楽寺に秘蔵されていたという記載や、『妙法天神経』が夢告によつて性空上人に授けられ秘蔵されていた、という伝承と類似する。また、天神の守護を得られるという発想は、書写と詠歌という違いはあるものの、丙／d系統の百首奥書に見られる「右御詠譚毎日一偏詠人常恒天神令守護現世安穩後生善所不可疑」⁽¹⁸⁾と共通する。

このような特徴的な設定が百首に神秘性や信憑性をもたらし、天神の詠作として享受される基盤を形成していったと考えられる。では、当該百首にのみ見られる「貞治元年二月」や「北野社」「為重卿」といった極めて具体的な設定は、どのような効果をもたらしたのだろうか。

まず、貞治元年（一二三六）、改元前のため実際は康安二年二月という日時だが、同月十日に、南朝方の攻撃によって近江に逃れていた後光厳天皇が帰京し、戦乱の続いた世にようやく平安が訪れ始めていた時期であった。天神に関係

する事件としては、貞治二年（一三六三）六月という極めて近い時期に、九州安楽寺から天神の神託詩歌が將軍義詮に進上されたという記録が残されている。この「安楽寺神託詩歌」を巡る状況は、由來譚の語る状況と類似する点が見られる。以下に、『後愚昧記』^⑨貞治二年六月の関連記事を抜粋する。

八日、丙午

頓阿法師^{哥人也}、以狀^{付女房}、示送云、安楽寺神託詩哥自鎮西注進之間、親王・執柄・大臣家等為大樹沙汰勸進之、題社頭祝一首也、可有御結縁云々、可詠之由返答了、

廿一日、己未、

北野奉納哥、遣頓阿法師許、遣頓阿許北野勸進哥書様、
〈高檀紙一枚二書之、不加裏懸紙、以同紙二枚如立文
裏之、押折之、居柳宮遣之也〉

井上宗雄氏の論考^⑩を参考にこの経緯をまとめてみよう。
まず貞治二年六月八日、安楽寺で天神の神託によつて詩歌が授けられ、それが將軍義詮へ進上された。義詮は結縁のために人々に「社頭祝」題で詩歌奉納を勸進、その後、頓阿が仲介役となつて北野社へ人々の和歌を奉納したといふ。

一方「神託百首」の由來譚では、貞治元年、北野社の地中に埋まっていた百首が、夢告によつて光嚴院に授けられた。院の命により掘り出された百首は、その後、筑紫からやつてきた範譽に伝えられたという。全てが対応するわけではないが、貞治二年と元年、詩歌と百首、將軍と院（天皇）、安楽寺から北野社への詩歌奉納と、北野社から筑紫への百首歌流布と、特定の要素が対を成すような構成となっている。ここまで対応関係が見られると、由來譚は、「安楽寺神託詩歌」の一件をもとに、それになぞらえるようにして仮構されたものだったとは考えられないだろうか。由來譚の作者は、実際に起こった「安楽寺神託詩歌」という出来事の固有名詞を変更して再構成し、具体的で、いかにもありそうな百首発見の由来を作り上げたものと想像される。「安楽寺神託詩歌」では和歌奉納のために奔走したのは頓阿であつたが、由來譚では御子左為重が頓阿に相当する役割を担わされている。百首発見に関わる人物では徳大寺三位や堀河侍従、関白らが実名を表されていないのに対し、為重のみが名を記され、貞治元年時点の官職ではなく、極官で示されている。これは歌道家の人の手を経たことを由來譚の読者に提示し、神託百首の信憑性を高めようとした意図があつたからではないだろうか。

四 百首歌の作者

それでは、實在の「神託詩歌」を模した由来譚と、百首本体はどのように関わるのであろうか。

百首の巻軸歌には、天神の性質と関わる歌が見られる。⁽²²⁾

偽もしづめしとてや此里のうきにたへずは神の守らん

(95)

神垣や引しめ縄のひとすぢに君をぞ守る万代までに

(96)

蘆原や天照神のむかしより君をぞ守る万代までに(97)
95番の歌意は取りにくいが、左遷された道真が死後名譽を回復したことを踏まえ、「偽りを正したということ」で、この北野の里で、つらい目に合い、堪え難く思っている者は神が守ってくれるだろう」と詠んだものである。同様の発想は他の「仮託歌集」の「なきなにはいかなる人のしづむべきちかふ北野の神のめぐみに」(B甲/I系統)にも見られる。結句の表現も「心だにまことの道にかなひなばいのらずとても神やまもらん」(家集B/I系統、百首丙/d系統など)のように、類似した表現を持つ歌が見える。96・97番歌は、同じ下句「君をぞ守る万代までに」が連続し、帝を守護し続けることを約束する。天神が院に対して守護を約束する

由来譚の内容とも関わるだろう。

雑部には、他の「仮託歌集」と類似した趣向を持つ歌も数首見られる。

いにしえはおどろかれにし暁の老てねざめの鐘をこそ

きけ(86)

歌意は「昔は暁の鐘の音によって目覚めたのに、老いて寢覚めがちになった今は、暁方に目覚めて鐘の音を聴くようになつてしまった」というもので、別系統に見られる「鐘の音をまたでも夢の覚めるはしらぬに老や近くなるらん」(B甲/iii系統など)と類似した内容を持つ。詞や趣向が完全に一致するわけではないが、天神詠のバリエーションとして捉えられた可能性がある。

一方「東風吹かば」のような勅撰集などに入集する道真の歌は一首も収載されていない。また、他系統の「仮託歌集」には「東風吹かば」詠の類似歌が多く見られるが、本百首では「今もなを心づくしのむかしよりあるじ忘れぬ梅が香ぞする」(6)のみであり、「仮託歌集」としては、天神を想起させる歌が少なく、天神真作を強調する由来譚に比して、百首歌内の「天神」の影は希薄であると言えよう。さて、百首歌全体を見ると、天神像の姿に重ならない作中主体が浮かび上がってくることに気づく。

老らくの涙をそへて霞らし我身ひとつの春のよの月

(10)

もろく散る老木の花を吹よせてなみにいろそふ志賀の

唐崎(16)

老らくの涙をそへてむら時雨ふるにぞいとど袖はぬれける(49)

花の香に馴しばかりの名残にてかふるもかなし墨染の

袖(21)

いつよりか紅葉の色に成ぬらん我がすみぞめの衣手の

森(46)

前半三首は自らの老いを詠むもの(百首全体では前掲86番歌も含めて六首見られる)で、後半二首の「墨染の袖(衣)」

は作中主体が僧形であることを表す。詠者の老いに言及した歌だけならば、他の「仮託歌集」にも確認できるが、出家者の姿を詠むものは皆無である。道真の出家については、『大鏡』に「やがて山崎にて出家せしめたまひて」とあるものの真偽は定かではなく、「仮託歌集」においても「そめばやな心のうちを墨染に衣の色はともかくにも」(C／口系統)のように心中では仏道を希求しつつも官人として生きた姿が詠まれる。老いた出家者という姿は他の「仮託歌集」には見られず、大変珍しい設定である。

雑部には次のような歌もある。

住吉の神もうけずはいかでかはあつむる玉の数に入ま

し(93)

「集むる玉」とは、『新後拾遺集』撰進の折に詠まれた「今ぞしるあつめし玉の数数に身をてらすべき光ありとは」(新千載集・雑中¹⁹⁷⁶為定)というような用例から、勅撰集を表すと考えられる。93番歌は「住吉の神が願いを聞きとどけてくれたお陰で勅撰集入集を果たした」と詠んでおり、住吉の神への謝意を表している。続く94番歌も「住吉の神もあわれとしき嶋の道ある代をばさぞ守るらん」と、住吉の神を詠み、和歌の道が盛んな御代を寿ぐ。確かに道真詠は勅撰集にも入集しているが、やはり、このような歌は他の「仮託歌集」では確認できない。

このような特徴から、当該百首が類例を見ない新たな天神像を構築しようとしたと考えるよりも、ある人物の詠作を流用して「仮託百首」を編纂したと想定した方が良いように思われる。老いた出家者や勅撰集入集の喜びなどは、編纂に用いられた資料に基づくものではないだろうか。

本百首内には、『源氏物語』夕顔巻を踏まえた一首「たそがれにひかりをそへし夕兒の花こそやどのしるべ成けれ」

(27) や、前掲10番歌や「しら玉かなにぞと見れば貴船川なみまに見ゆる蛭成けり」(29) など、『伊勢物語』の表現を踏まえた歌が四首ほど見られ、ある程度歌を詠み慣れた人物の詠作という印象を受ける。百首中の歌が他資料に見られるか確認したところ、同一歌と見なしうる作が三首存在した。

まず、源高国の歌が、二首確認できる。

うつつにはまた渡るべき道もなし見しをかぎりの夢の
うき橋 (71)

↓藤葉和歌集 572 源高国「恋うたとて」

富士の根にたえぬは猶も煙にてわか偽やけなばけぬべ
き (75)

↓新統古今集・恋一 1095 源高国(四句「我が身ひとつぞ」)

次に、惟宗光吉の歌が一首確認できる。

おきあまる露も乱て浅茅生の小野のしの原秋風ぞふく

(33)

↓新拾遺集・秋上 381 惟宗光吉、続現葉和歌集 255 惟宗

光吉(両集とも「題不知」、二句「露はみだれて」)

また、百首内の「西川やむかしの跡をいさめきて御幸
ひさしき鶴の毛衣」(91) は、元亨三年七月の亀山殿七百
首「寄鶴祝」題で詠まれた光吉の「西川やみゆきの跡をか

さねても千世とぞちぎる鶴の毛衣」(新統古今集・賀790 惟宗
光吉、光吉集 306、亀山殿七百首 699、題林愚抄 10652) と歌の構造が
類似している。

二首一致した源(畠山) 高国は、嘉元三年(一三〇五) 誕生、観応二年(二三五二) 没。足利尊氏に従い、建武三年(一三三六)、淀や宇治で戦った後に伊勢守護となったが、暦
応元年(一三三八) に解任される。貞和元年(一三四五)、
嫡子国氏が奥州一方管領に補任されたため、ともに下向。
観応の擾乱により、直義派の奥州管領吉良家らに攻めら
れ自害した。『風雅集』に一首、『新統古今集』に一首入集。
『藤葉集』にも二首確認されるが、家集は残されていない。
康永四年(一三四五) 頃成立の『藤葉集』 368 番歌の作者名
注記に「畠山上野入道」とあり、出家していたことが知ら
れる。

次の惟宗光吉は文永十一年(一二七四) 誕生、文和元年(一
三五二) 没。医師吉国男で権侍医、四位右京権大夫を務めた。
法名は玄照。観応元年(一三五〇) の「玄恵法印追善詩歌」
「為世十三回忌和歌」に玄照の名が見られるため、この年
までに出家していたのであろう。二条派の有力歌人として
活躍し、亀山殿千首・亀山殿七百首・内裏千首・為世家日
吉社奉納百首などに出詠、『続千載集』以下に十九首入集す

る。『続後拾遺集』撰集の折には和歌所寄人となり、『藤葉集』の撰集にも関与、経継の文保百首や亀山殿七百首を清書している。家集に『光吉集』があるが、光吉没後、子の光之が『新千載集』の資料として編んだものとされる。⁽²⁴⁾

高国と光吉は、鎌倉末から南北朝初期の同時期に活動している。高国に家集は無く、『藤葉集』や勅撰集の撰集資料も明らかではない。一方、光吉には没後に編纂された家集しか存在せず、歌歴に比して現存する詠作数は多くはない。僅か四首の存在から全体を見通すことは危ういが、百首のうち、他資料で確認できなかった歌の中に、高国や光吉の詠作が含まれている可能性も否定はできないだろう。少なくとも、両者とも、本百首に見られた勅撰集入集と出家者という設定に合致し、高国には、自身の感慨とは限定できないものの、「春といへばむかしだにこそかすみしかおいたもとにやどる月かげ」(風雅集・雜上¹⁴⁸⁷)という老いを詠んだ歌が残されていること、光吉の家集に「墨染衣」や「歎老」を詠んだ歌が存することが確認できる。

このような想定を試みたのには、他にも理由がある。本百首には、具体的な詠歌事情を想定しないと解釈が困難な歌も少なからず含まれているからである。例えば、次の88番歌を見てみよう。

我が道をためしにひけば梓弓いるさの野邊の末もたのもし(88)

二句目「ためしにひく」は、長寿や御代の長さを寿ぐためなど、長く続くものを例示する際に使われる措辞である。掛詞を駆使して「梓弓いるさの野邊の末」という詞を間に加えてはいるが、一首の意は「我が道を(長く続く)例として引けば、行く末も頼もしいことです」という内容になるだろう。では「我が道」とは何か。和歌の用例の多くは「和歌の道」を指す。ただし「我が」とあることから、詠者の立場によって、指示内容が変わり得る詞である。「梓弓」という措辞から武士の道のことも捉えられるが、また一方で、『光吉集』の述懐題で詠まれた「もろこしの国はじめるすべらきの人をすくひし道ぞわが道」(光吉集²⁸⁷)という用例も注目される。中国の伝説上の皇帝、神農から始まったとされる医道を、光吉は「我が道」と称しており、このような長い歴史を持つ医道によそえて、行く末を「たのもし」と評したとも考えられるのである。

もっとも、本百首に高国や光吉以外の詠作が収められている可能性も大きい。同一歌とは見なせないが、和歌の一部や趣向が他資料の歌と重なる例も確認できている。だが、そのような表現の詠作時期を見ると、高国や光吉とほぼ同

時期の作例が二十例ほど確認できるのである。ここでは四首のみ掲げ、一致する表現に傍線を、類似表現に破線を付した。

くればつるきのふの嵐さえかへり雪気の雲ぞ春に残れる(1)

↓としくれしきのふの嵐猶さえて雪げの雲ぞはるにかかれる(文保百首198頓覺)

したひえぬ秋のわかれの涙よりあすをもまたでふる時雨哉(47)

↓したひこし秋のわかれの涙より袖もほしあへぬはつ時雨かな(延文百首56時雨・後光厳天皇／新拾遺集・冬559)

とどまらぬ秋のわかれの涙よりあすをもまたで袖ぞしぐるる(延文百首655九月尽・尊胤)

ふかき夜の哀を添て月影の入野の鹿も妻やこふらん(76)

↓ふかき夜のあはれをそへて有明の月にいとはぬ花のしら雲(龜山殿七百首70曉花・忠守)

家づとに手折てかへる一枝のはなをばゆるせ春の山風(15)

↓ちらぬまにしばしかざさん桜花折るてにゆるせ春

の夕かぜ

(龜山殿七百首68折花・経繼)

1番歌は、立春の空に冬の景物である雪気の雲が残っている様子を詠むが、ほぼ同じ趣向が文保百首の頓覺詠に見出される。47番歌は九月尽日、秋との別れを惜しんで流す涙に時雨を重ね合わせる趣向で、詞や趣向の一致が延文百首の後光厳天皇や尊胤法親王とよく似ている。76、15番歌も傍線部が一致、破線部が類似している。延文百首は高国や光吉の没後間もなくの催しだが、ほぼ同時代の作品に共通表現が多いことがわかる。とりわけ光吉と関係の深い催しや歌人が散見される。ここに挙げた例以外を見ても、やはり鎌倉末から南北朝期の詠作との類似表現が多い。また、南朝方の作品との関連は見られず、二条派を中心とした催しと共通した表現が多いようである。このことから、高国・光吉詠以外の作が当該百首を構成していたとしても、ほぼ同時代の作品が用いられている可能性が高いと考えられる。これは、三代集の道真詠から鎌倉期の詠作、禪僧の歌すら含む他の「仮託歌集」とは異なる特徴を示している。本百首は他の「仮託歌集」のように様々な時代の資料を吸収・再構成したというよりも、かなり狭い時期・範囲の詠作を収集・再構成し、場合によっては、雑部末尾のように天神詠らしく改変を施したものでないだろうか。

五 おわりに

「天神仮託百首」戊／＼系統は、貞治元年（二三六二）に天神の夢告によって授けられたという偽作された由来譚と、整然とした構成を持つ百首歌から構成されている。由来譚は、実際にあった貞治二年（二三六三）の「安楽寺神託詩歌」の展開になぞらえて仮構され、秘説性や信憑性を高めていた。百首歌には、畠山高国や惟宗光吉という鎌倉末から南北朝期の人物の詠歌や同時代の和歌との類似表現が含まれ、奇しくも由来譚で示された貞治元年に近い時期の歌を収集・改変・再構成されている可能性があることを指摘した。推測を重ねることになるが、由来譚を偽作する上で、「安楽寺仮託詩歌」の一件を踏まえ、北野社を強調していることから、北野社関係の人物の手によるものかと想像される。和歌を利用された光吉であるが、『光吉集』には北野社と関連ある詠歌も収められている。小倉公雄にすめられた北野社奉納和歌（光吉集³⁰⁰）の他、「夢想のことありて、同社（稿者注、北野社）に奉納し侍ける卅首歌の中に」（同³⁰¹）という詞書も見られる。このような北野社との関わりが、「仮託百首」構築へと利用されるきっかけとなったのかもしれない。

「天神仮託歌集」は広く享受されながら、これまで偽書として和歌研究から斥けられてきた面がある。武井氏の指摘通り、「仮託歌集」は和歌史の「周縁」に位置するものであり、他の撰集や家集類と同一に扱うには、難しい面を持っている。だが、中世における天神信仰が和歌という形で表出した作品であり、その問題点を明らかにしていくことは、中世における信仰の実態を知る一助となるのではないだろうか。また、中世盛んに行われた奉納和歌と、このような偽書の誕生は、根幹を共有しているのではないかと思える。神と人との歌の贈答は平安時代から見られるが、奉納が神仏への働きかけであるのに対し、仮託歌集は数多くの奉納和歌に対する神からの「答歌」としても機能し得たのでないかと想像される。自身の奉納に対する神の応答のように感じられるからこそ、多くの「仮託歌集」が生み出され、享受されたのではないだろうか。そのような「仮託歌集」の形成もまた、奉納とは異なる方向に発露した信仰の形だったのではないかと考えるのである。

【注】

(1) 『大鏡』は日本古典文学全集、『菅家御伝記』は群書類従(第二輯・巻二〇所収)より引用した。これらの記述と道真の家集とされる「菅家」との関係については、久保本秀夫「道真集」(『中古中世散佚家集研究』青簡社、二〇〇九年)に言及がある。

(2) 武井和人「道真仮託家集・百首研究序説」(『中世和歌の文献学的研究』笠間書院、一九八九年)により、『新古今集』巻十八・雑下巻頭「菅贈太政大臣」による十二首の一字題詠や、冷泉家時雨亭文庫蔵『集目錄』の「菅家」という記載から、『新古今集』の撰集資料となり得たような家集が想定されている。ただし、この家集は道真真詠とは認めがたいという。その後の研究に、有吉保「撰者と資料―巻十八雑歌下・道真詠歌の場合―」(『新古今和歌集の研究 続篇』笠間書院、一九九六年)、浅田徹「菅原道真の新古今入集歌おぼえがき」(『早稲田本庄高等学院国語科論集』創立二十周年記念特別号、二〇〇三年三月)、前掲注1久保本論考など。

(3) 前掲注2武井論考など、先行研究では「道真仮託家集・百首」や「道真仮託歌集」などと呼ばれることが多い。渡辺麻里子「嵯山元賢の天神信仰―道明寺天満宮蔵『瑠璃壺之詠歌

百首』をめぐって―」(『黄檗文華』一二二、二〇〇三年七月)では、歌集の性質から「天神仮託歌集」と称するのがふさわしいとする。本稿で扱う「仮託百首」(戊/f系統)も、詠者を天神とするものであるため、この名称に従った。

(4) 前掲注2武井論考。以下、武井氏の研究を引用する場合、特に断らない限り、同論考に拠る。武井分類では、一四本もの写本(未見一三本を含む。江戸期に抄出された編纂本は除く)を紹介し、歌数から「家集」と「百首」に大別、巻頭・巻軸歌の別から「家集」を八系統、「百首」を六系統に分類した。これによって、「仮託歌集」には異なる内容の歌集が十四種類も存在していたことが明らかとなった。

(5) 小峯和明編『宝鏡寺蔵『妙法天神経解釈』全注釈と研究』(笠間書院、二〇〇一年)

(6) 前掲注5所収、安原真琴・渡辺麻里子「『妙法天神経』の和歌」
(7) 新たな写本を紹介したものとして、久保貴子「山岸文庫「菅原道真家集類」に関する一考察」(『実践国文学』四〇、一九九一年九月)や飯塚ひろみ・三浦喜子・吉海直人「道真仮託歌集『菅家御集』の翻刻と紹介」(『同志社女子大学日本語日本文学』一八、二〇〇六年六月)、飯塚ひろみ・芝万智・吉海直人「道真仮託歌集『聖廟御詠』の翻刻と紹介」(『同志社女子大学日本語日本文学』二〇、二〇〇八年六月)な

(8) 七本は以下の通り。
どがある。「仮託百首」の享受の例としては、前掲注3など。

①道明寺天満宮蔵「天神御詠百首」(内題)／外題ナシ／写一冊 未見。『藤井寺市史』第十巻史料編八中(藤井寺市、一九九二年)に翻刻あり。

②大阪市立大学学術情報総合センター森文庫蔵「菅家御年譜附百首御歌」(二八九、一KAI)／内題「菅家御詠哥百首」／写一冊

③刈谷市立図書館村上文庫蔵『蓬盧雜鈔』(六二〇三／一二〇／九丙一)所収「北野天神百首御詠」／写一冊

④岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『菅家百首御詠歌』(P九一一—五二)／内題「菅家百首御詠歌」／写一冊

⑤神宮文庫蔵『瑠璃壺御詠』(三／一四四九)／内題「玉玉竹木日瑠璃歌／御詠調 百首」／写一冊

⑥実践女子大学図書館山岸徳平文庫蔵『天神百詠』(三三九)／「天神宮御遺書之百詠／并秘文五実名」／写一冊／注8久保論文で紹介されている。

⑦築瀬一雄氏蔵本(江戸中期写) 未見。注2武井論考の紹介に拠る。

(9) 注2武井論考参照。乙／c系統百首と丁／e系統百首、己／g系統百首がそれぞれ五〇首以上の歌を共有するのに対

し、当該の戊／f系統は四首のみ。その四首も、由来譚を欠く池田家本と森文庫本にしか見られない。また、秋部末尾に連続して収載されたこの四首は、前後の季節の推移に沿った排列と合致しない。この四首は他系統からの増補とも考え得るため、本稿では百首歌考察の対象に含めなかった。

(10) 原文「前の光厳院」(道明寺天満宮本、村上文庫、山岸文庫本)。神宮文庫本では「後光厳院」。なお、貞治元年当時在位は後光厳天皇。

(11) 注8掲出の『藤井寺市史』所収の翻刻に拠る。

(12) 神宮文庫本は当該部分、「此次第、主上より外は時の閑白、為重卿、北野法眼より別に知る人もなき物なり。」の後に「希代の神異：(中略)：当法には何のものは是にすぎんや。あなかしこ」と続き、法眼、兼載、祐増、宗綱が相伝したと記され、道明寺天満宮本などに見られる「康暦元年二月廿日後筑紫上洛して」以下の文が無い。神宮文庫本のような記述は他に見られず、また、法眼・兼載以下の相伝についても確認できない。よって、神宮文庫本の記述は、道明寺天満宮本などに見られる由来譚末尾部分の欠脱を補うための改変と捉えた。

(13) 山岸文庫本も前掲注12の神宮文庫本のような末尾欠脱の増

補だとも考えられる。ただし、神宮文庫本に比べ、文章の接続にも不自然な点が無いため、道明寺天満宮本などでは失われてしまった本文を存していると解釈した。

- (14) 由来譚部分は私に濁点と句読点を付し、適宜漢字をあてた。

山岸本の簡単な書誌をここで記しておく。写一冊、縦19・8糎×横26・6糎、外題は「天神百詠」、内題「天神宮御遺書之百詠／并秘文五實名」。墨付十六丁、本文一面八行、和歌一首二行書で、一部散らし書きのように記されている。

百首歌の前に五実名、百首の後に七言句の秘文と貞治元年天神の夢告によって百首が北野社から発見されたという由来譚、増補詩歌一二首を付す。百首歌は春二〇首・夏一〇首・秋一七首・冬一〇首・恋二〇首・雑二〇首の全九七首。

- (15) 神宮文庫本の同趣旨の由来譚について、井上宗雄氏も疑問を呈している。『中世歌壇史の研究 南北朝期』改訂新版(明治書院、一九八七年)六八二頁参照。

- (16) 注6参照

- (17) 岡山大学附属図書館池田家文庫蔵『聖廟和歌』(九一一・一三・三〇)に拠る。

- (18) 多和文庫蔵『毘沙門為兼歌集／天神御秘歌』(四・一〇)に拠る。

- (19) 大日本古記録『後愚昧記』一(岩波書店、一九八〇年)より引用。

- (20) 注15井上著書六〇五頁参照。ただし、井上氏は「天神仮託百首」と「神託詩歌」を関連づけてはいない。

- (21) 徳大寺三位は徳大寺実時(貞治元年当時、正三位権中納言)、堀河侍従は堀河具言、関白は近衛道嗣に比定し得る。

- (22) 和歌には私に濁点を付し、山岸文庫本の歌番号を括弧内に付した。それ以外の仮託歌集を引用する場合は、特に断らない限り注2武井論考所収翻刻を用い、括弧内に武井分類と全注釈分類を示した。

- (23) ただし、一見単なる四季歌であっても、「天神」の作として、隠喩や寓意を読み取られる場合がある。ここでは、「(主を忘れぬ)梅」や「筑紫」「北野」など、天神を表す典型的な用語の有無を基準として判断した。

- (24) 前掲和歌以外に「ひとりすむやどの友とや積らん我身ふりゆく庭のしら雪」(55)「老らくの惜かりつるもたらちねの跡とふまでとおもふ成けり」(85)がある。

- (25) 注15井上著書五一六～五一七頁

- (26) 注6参照

- 〔付記〕 本稿は、国文学研究資料館基幹研究「王朝文学の流布と継承」(二〇〇六年～二〇一〇年度)、及び科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。